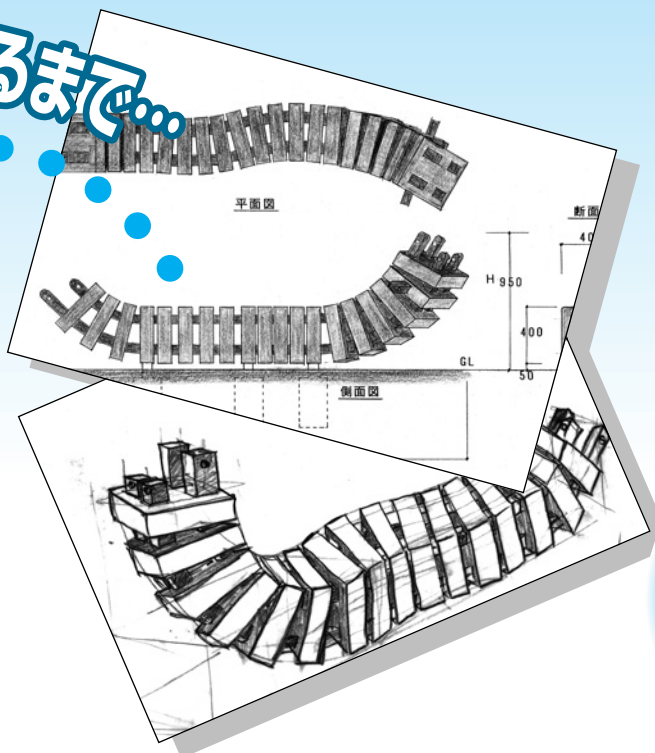
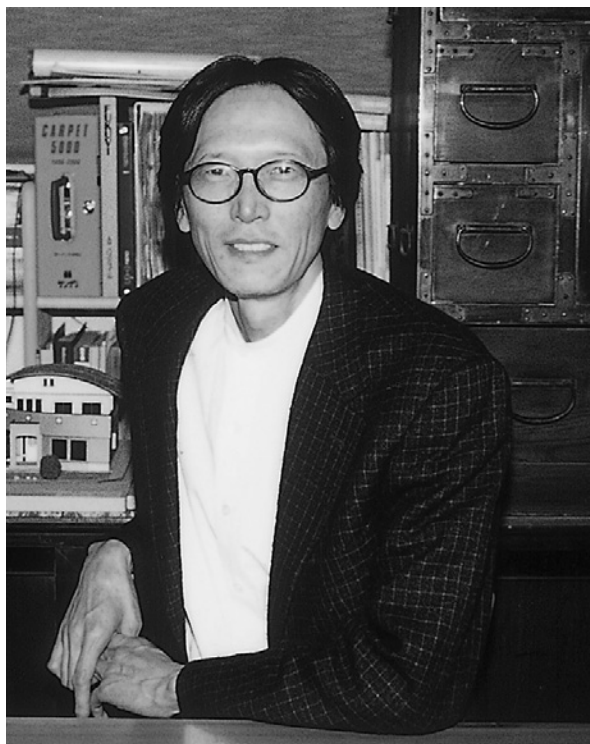


# 夢追人

チができるまで...



今回の夢追い人は、近年デザインプロムナード、大川中央公園などの環境デザインを手がけてこられた、松林建築事務所の代表でデザイナーの**松林茂光**さんにお話を伺ってみました。



環境デザインのおもしろさはどこにあるのでしょうか？

やはりいくらでも地域のイメージアップに貢献できることだろうとおもいます。その土地の環境や景観は、外部に向かつてのメッセージを鋭く発信しています。それでそれが心地よいメッセージであれば、大川、ひいては家具の大きなイメージアップにつながると思うので

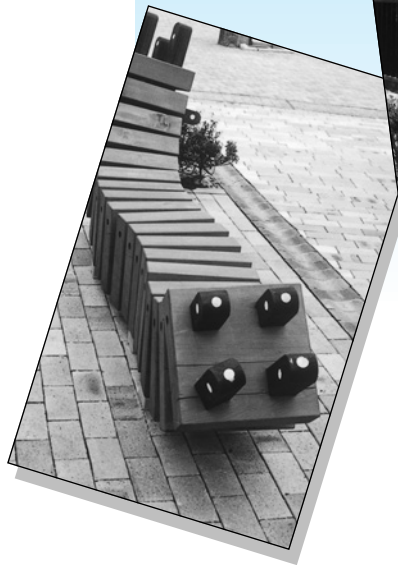
す。それが環境デザインの役割であり、非常におもしろいところだと思います。

なるほど、やりがいとなっているわけですね。でも、地域全体が関わってきますから難しい面もあるのではないのでしょうか？

もちろん私が扱うのは地域の一部分にすぎないわけですが、地域の景観に関わるのは事実だろうと



# 『木の虫』という名のベン



思います。でも第三者の視点、客観的な視点で自分の表現が本当に地域の個性にふさわしいものだろうか、と言う葛藤は常にありますね。

**そのギャップを埋めるためのどんな努力を払っておられますか？**

地域の歴史、過去の人々やその時代の風土を徹底して研究するようにしています。過去から現在を見ると、不思議と地域のアイデンティティーがなにか、鮮明に見える気がします。

**松林さんはデザインをするに当たって、まず言葉を設定されるそうですね。これはどういうことですか？**

たとえば中央公園内に『木の虫』と名付けたベンチがあります。よく金の虫かねむしということがあります。実は木の虫は大川の人たちのことです。もちろんこれはいい意味ですけどね。(笑)私の周りにはそういう人たちがいっぱいいます。ですからこのベンチをデザインする前に、『木の虫』と言う言葉を決めたわけです。そうしてデザインしていくのですが、どのように組み立てるだろうか、どのように独自性を出そうか、考慮しながら作り上げていくことになりました。

**興味深いですね。では、その言葉の引き出しを充実させるため普段から心がけておられることはありますか？**

海外を含め、極力旅行に出ることにしています。  
**意外ですね。**

様々の建築物や都市の景観を数多く見るようにしています。現物主義ですね。よくヨーロッパの有名な画家の作品が日本でも展示されるのですが、同じ作品を現地で見ると違うんですよ。その土地の成り立ち、風土、空気に触れながら見ると、本当の味わいが分かる気がします。そのようなものがインスピレーション、まあ、言葉の源泉になっていると思います。

**デザインプロムナードや中央公園にはそうした言葉が散らばっているわけですね。**

「そういえるかもしれません。デザインプロムナードの際には、市の都市計画課とともに、全体のデザイン、配置するモニュメントの公募、価格交渉、施工まで一貫して手がける機会に恵まれましたから、二つのテーマのもと、おもしろいデザインができたと思います。

**今後の夢は何でしょうか？**

月並みですけど、今の仕事を生涯にわたって続けていきたいと思っています。

**そうですね。それは今の仕事に充実している証しなのでしょうね。ありがとうございます。**

インタビュアーでは、ミケランジェロと彼の作品のすばらしさ、ノートルダム寺院、バルティノン神殿の建築様式の卓越性など専門的分野にも話が及んだ。熱のこもった話から、本当にデザインが好きなんだなあと感じた。今後の活躍を期待します。

